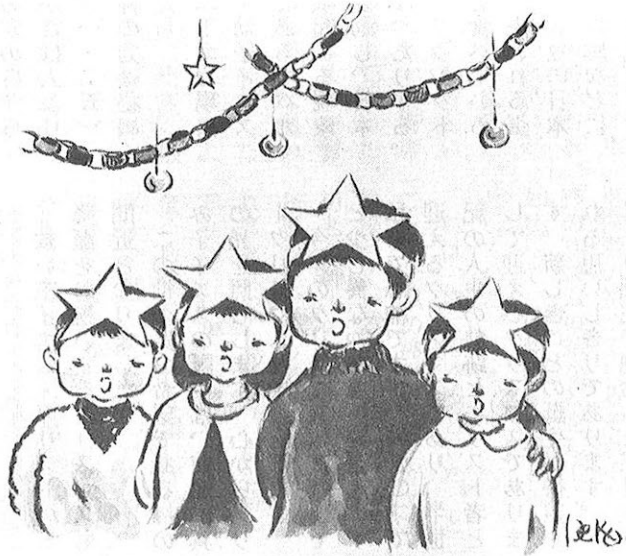


光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替／東京3-128022
 印刷／(株)ドモン企画



グロリア!

クリスマスに想う

ローマの信徒への手紙

理事長 福島 勲

人はほどほどの親切や恵みに
 対しては、感謝もしお礼も言う
 が、とてつもなく大きい恵みに
 対し理解が及ばず納得できない。
 神の子イエスが地上に誕生さ
 れた。しかも我々人間の罪のため、
 救いのためと言うと、誰も
 が戸惑い、理解し難いのである。
 聖書自身「ああ深いかな、神
 の知恵と知識との富は。そのさ
 ばきはきわめがたく、その道は
 測りがたい」という。(ローマ
 ・十一・三三)

不浄のあるのは仏土が実現され
 るための必須の契機なのである。
 穢土は仏土が実現される媒介で
 あり、手段であり、方便である
 と説かれている。
 聖書は大きい罪のゆるしを喜
 びはするが、罪のゆるしの恵み
 が増し加わるために、罪にとど
 まるべきかと設問して、断じて
 そうではないと否定する。(ロ
 ーマ・六・十二)

そしてまたその前の句「神は
 全ての人をあわれむために、全
 ての人を不従順の中に閉じこめ
 た」という句に至っては、また
 一つの難解な聖句である。
 われわれが救われるための契
 機として罪にあるかのように読
 めば、罪そのものもよしと肯定
 されようと言いたくなる。

神の側でも、人間の方でも罪
 が救いの方便ではない。
 罪はただただキリストによら
 なければ、どうにもならない現
 実なのである。それ故にキリス
 トの周辺には罪に悩み、病に苦
 しみ、世の権威者に痛みつけら
 れた弱者が群れをなしている。

嘘も方便などという、この方
 便という字は仏教用語で維摩経
 にある。つまり、この世はもと
 もと清浄であるはずだが、悪や

最近の新興宗教にはそのよう
 な傷つき痛める不幸な人でなく、
 正常と思われる人々に呼びかけ、
 エリート意識でもって「幸福の
 科学」として、たちまち二三百
 万の信徒を集めているのがある。
 弱者の宗教でなく、強者の宗

教である誇りを持ち、自ら悦に入つて他を睥睨している。キリストは健かなものは医者が必要としないと言い（ルカ・五・三一）弱者を招かれ、罪の赦しと永遠の生命を与えられた。理屈に合わぬ神の愛のはからいである。神の愚かさは人より賢い（第一コリント一・二五）思わぬところに神の力は秘められ働くのである。

気象学のエル・ニーニョ現象とはスペイン語で、幼子イエスという意味だそうである。ペルー沖でクリスマス頃起こる現象で、海水の温度が変動し、日本など暖冬や冷夏になったりする。水温が上昇するとプランクトンが死滅し、それを食べている魚が獲れなくなる。失われる蛋白質を大豆で補う。大豆の日本への輸出が減少し、豆腐などに影響するといわれる。風が吹けば桶屋が儲かる式だが、神の恵みのエル・ニーニョ現象は更に複雑に作用して、罪ある者を限りなき喜びに導かれるであろう。クリスマスは罪のゆるしの主キリストへの感謝の祭である。真心をもつて祝うところ、

「荒れ野に水がわき、砂漠に川が流れる」（イザヤ三五・六）神の業があらわれるだろう。

クリスマスを迎えて

施設長 今関 公雄

救い主イエス・キリストのご降誕をお祝いするクリスマスも間近となりました。

この世の真の希望である神のみ子イエスの誕生は、前途に真の光を照らします。心からメリークリスマスと申し上げます。今年のクリスマスはこれまでと少し異なった思いで迎えます。私事で恐縮ですが、満五〇才を迎えるクリスマスであり、半世紀の人生の軌跡とキリスト者として迎えるクリスマスであります。新しいことの誕生が待望される思いしきりであります。四月より拙宅で開始した主日礼拝にとつても初めてのクリスマスとなります。私が牧師として執行する初めて聖礼典となります。将来的には光の子どもの家の宗教・信仰を支える群れの一つに成長することが期待され、いつの日か一堂に会しクリスマス

プレゼントに目を輝かす子どもたち、人生を希望をもつて歩む者と変えられるだろう。

礼拝を捧げることが願う者です。光の子どもの家では開設以来、キリスト誕生の次第の聖誕劇（ページェント）を、深津文雄

牧師によるシナリオによつて行っています。マリア、ヨセフ、羊飼いの博士などの登場人物を配し、聖書朗読、讃美歌、聖歌などに合わせて演じ、感謝と献身、参会者全員の「聖しこの夜」の斉唱で終わる、礼拝形式に最も近いと思われるものです。前夜にはキャンドルサーヴィス（燭火礼拝）を心静かに捧げ、夜中に、心を込めた手作りのプレゼントを、理事長夫人が作成の衣装のサンタさんが、夢見心地の子どもたちに届けます。聖書は「暗闇の中に歩んで民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照つた。」（イザヤ九・二）と告げます。救い主イエス・キ

リストの誕生は暗きに光をもたらすものとして描かれます。光の子どもの家の働きもまた暗きに光をもたらすものとなること祈ります。その命名も関わる子どもたちを「光の子」として養育することを願ったものです。

光の子どもの家が困難な開設を果たして以来、七回目の降誕節を迎え、文字通り「貧者の一灯」と言われる庶民の方々の善意に支えられている意義も大きいと思ひます。つまり、数多の「福祉の心」に励まされて歩が整えられている事実であります。

この年のクリスマスのご祝福を祈りつつ、ご支援要請のお声を掛けさせていただきます。自らの取り組みの貧しさを省みるにつけ、ご支援に報いる働きの至らなさを恥じ、心苦しく思ひます。しかし、時あたかもクリスマスでありませぬ。この地上のすみずみまで「恵みの光」があまねく照り輝くことを願いつつ、心豊かな福祉の輪に連なつて下さることを、伏してお祈りするものであります。

音楽会にて

エッセイ

中島 陸雄（県立高校教諭）

ある大学から招待券を頂いて、大勢の学生に交じつて音楽を聞く機会を得た。

見ながら曲を聴くくらいだから、私にとつては何かと指南役になつてくれる。そこでも、彼が、指揮者の持つてゐるそれぞれ独特のリズムの話などをしてくれたりして、休憩時間は終わろうとしていた。

オランダから来日中のロイヤル・アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団の演奏である。世界の一流の管弦楽団を思いがけなくも見、聞くことが出来た。しかも前から九列目十六番という、ほぼ中央のあたり、招待席だけあつて最高の場所であつた。最初の曲はブラームスの交響曲第三番。特に第三楽章は私の耳にも馴染みのあるものだったから、楽に聴けた。歯切れのよい素晴らしい演奏は、非常に感動的であつた。そこで休憩に入つた。

私は、席に帰ろうとした。ところが、私の席に女学生がすでに座つてゐる。彼女の隣に初老の紳士のお子さんなのかなと思つた。そうであれば、いざれ席を立つてくれる。少し待つてみた。しかし、両者の間には全く会話もなければ親しげな動作もない。どうしたんだらうと思つた。そのうち休憩の終わりを告げるベルが鳴り出した。私は思い切つて、「あの。大変失礼ですが、座席の番号が、間違つてゐるかも知れません。」と彼女に言つてみた。彼女は、さつと立ち上がった。そして、不意を突かれたように私を見ていた。私は自信がなくなつて、自

私は同行のTさんとロビーに出で談笑してゐた。「指揮のリツカルド・シャイアツツてあそこの料理屋のマスターに似てるね。ひげの具合なんか、そっくりだよ。」などと、二人でふざけたりしてゐた。Tさんは音楽畑の人ではないが、音楽にはやけに

分のポケットから取り出して、九列十六番を確認した。「すみません。ことによつたら、番号がダブつて打つてあるかも知れません。」と私は言つた。周りが客様の中で、彼女も私も目立たないように、小さい声で、神経を使いながら言い合つた。何かの手違いで、同一の座席に二枚の切符を発行してしまうというところ、あり得ないことではない。ところが彼女は「空いていたから・・・。」と言つて、プイッと後ろの方へ立ち去つてしまつた。

私は一瞬後悔した。まさにあそこが私の席だったのだが、せっかくなので座席についていた彼女を追いついてしまつた。私はどこだつて良いじゃないか。彼女の席は後方で、良く聞こえなかつたのかも知れないし、そうでなければ、彼女の席の近くでの私語などが耳障りだったのかも知れないのに。だから、休憩の時に空いてゐる前の席を見つけて、そこに座つたまでだったのだから。何ということをしつてしまつたのだから。しかし私は、心の中で反論も

試みた。「たとえ空席でも、最後の一曲だけを聴きにくるお客様だつてゐるかも知れないよ。それに、プイッと立ち去るのでなく、『すみません』とか『失礼しました』とか言つて、につこりでもしてみたら、あなたはどうにか美しく見えたらうに」。などと、自分の正当性を自分自身に言い聞かせようともしつていた。曲は、二曲目、三曲目と進み、会場に溢れる拍手のうねりに迎えられる、アンコールの小曲も終わった。みんな嬉しそうな表情をしながら会場を出て行つた。外は意外に冷え込んでいた。「Tさん冷えますね。こんな時は、むしろ雪でも降つていた方がロマンチックなんですよ。」と私は言つた。「寒いですね。しかし、雪が降つていたら私も男同士じゃあね。」とTさんは笑つた。「おたがいさま」私も言い返した。駅に向かつて、二人は肩をすぼめて歩いてゐた。そして、さつかり忘れて、心は十分に満たされてゐた。

うれしい

たのしい

虹の国から スペシャル

☆ ☆

中一 逸郎

クリスマスー十二月二十五日はイエスの誕生日。

僕がここに来る前のクリスマスは、ケーキを食べたりプレゼントをもらったりする日だとばかり思っていました。ここへ来た初めの頃、イエス様って何のことだろうと思ひ、しつくりきませんでした。

それが、毎週教会学校に行っているうちに、イエス様は、傷ついている人を見捨てたり避けたりせず、治してあげたり、目の見えない人を見えるようにしたり、貧しい人たちと一緒にいてあげたり、すごい人だと思ひ、自分のそばにいるような身近さを感じるようになってきました。

そして、救い主ってそういう人のことなんだと分かるようになりました。大切なことを教えてくれたイエス様の誕生日を今年もお祝いします。



きれいな声で歌いたいです。

☆ ☆

二年 多歌音

まりやさんとよせふさんは、おでかけしてどこにもとまる家がありませんでした。いまごろはどこをあるいているのかな。うまごやのあるやどやのちかくかもしれないな。

ひつじかいは、夜もひつじのぼんを、てんしは、なかく空をまわって、わたしをみているのかな。

早くイエスさまが生まれたらいいな。みんなでイエスさまが生まれるのをまつています。

☆ ☆

二年 亜季

去年のクリスマスの前の夜に、私がねていると、サンタさんがきて「メリークリスマス」っていったので、私もおきて「メリークリスマス」といいました。そしたらサンタさんが、「はいいい子だからプレゼントだよ」と、よふくと本とかをもらいました。サンタさん、ことしもきてね。

☆ ☆

二年 高雄

ページェントで、ひつじかいをやりました。

ひつじかいはまずしい人です。きているものはぼろぼろです。とてもびんぼうでした。

でも、さいしよにイエスさまが生まれたことをしりました。

☆ ☆

五年 加津子

私は、クリスマスページェントが大好きです。それは、光の子どもの家の人々が皆でいっしょに協力して練習したりしていくうちに仲良くなるからです。始めのうちにはうまくいかなかったけど、だんだん上手になっていくとそんなことがなくなると、楽しくなってきました。みんなの心が一つになっていくのが分かります。

一つになった心がとどき、神様がはげましてくれていると感じます。今年も、神様、見てちょうだい。

☆ ☆

中二 晃子

今年もクリスマスがやってきました。それは常識ですがイエスさまの誕生日。

クリスマスに関する本を何冊か読んできました。「クリスマスキャロル」では、欲張りなスクルージが、クリスマスイヴに霊に誘われ、自分の過去の未来や現在を示され、貧しい者や苦しんでいる人たちの心にふれ、優しくなる話だし「マッチ売りの少女」など、貧しい人の豊かな心のお話のようです。

でもイエス様はやっぱり、普通の人ではない、人間の心や生き方を変える、そう、神様だと思います。だから、世界中がこの日を祝うのだと思います。

☆ ☆

一年 さえ

もうすぐクリスマスです。アドベントれいはいはいのあとみんなできよくじをします。そして、クッキーがまいしゅう一つづつふえて四こになるとクリスマスです。それから、サンタさんがやってきます。そして、すてきなプレゼントをくれます。なにをもらえるか、わくわくします。

☆ ☆

三年 勇

クリスマスの前の夜、きまつてぼくがねてからサンタクロースが来ます。

ねるとき「来てくれるかな」とけんかしたり、いじわるだったりしたこと思い出して心ばいします。でもだんだん「何をもらえるかな」と考えてきて楽しくなります。

本当は、本物のサンタさんに会いたいです。

去年は、朝になってプレゼントがあつてうれしくて、あけてみると、ぼくの大好きなドラゴンボールZのカードも入っていました。

どうしてサンタさんは、ぼくの好きなカードのことまで分かったのかな。

☆ ☆

四年 研一

ぼくはクリスマスのお祝いの会が楽しいです。去年もとても楽しかったです。もちろん今年も楽しみで待ちどおしいです。

お祝いの会でも一番楽しいのはプレゼント交かんです。ページェントでは聖歌隊になって、

☆ ☆

一年 かずし

くりすますには、べいじえんとをし

ます。おきやくさまはきてくれますか。ぼくたちはいっしょけんめいべいじえんとをやります。

だから、よくみてください。たのしいですよ。いっしょにたのしく、さいごまでやりましょう。

☆ ☆

三年 萌季

アドベントは、クリスマスの前にかざられたクランツにろうそくが一本づつふえていきます。だから、ろうそくのふえる日が楽しみです。四つになると、イエス様のたん生日です。

私はアドベントはなくてはいけないものだと思います。それは、きゆうにクリスマスになったら、なにもじゆんびができないからです。

アドベントがあれば、ろうそくの数がふえていき、だんだんクリスマスに近づいていって、少しづつ、クリスマスを用意しているんだと思います。だからアドベントは大切だと思います。

中二 睦男

クリスマスは、世界中のみんながいつしよにお祝いするような素晴らしいことだと思います。でも、この地球上ではクリスマスを祝うどころか、生きることさえやつの人たちがたくさんいると言われます。そんな人たちに僕たちがほんの少しでも役に立てたら、もって素晴らしいクリスマスになるだろうと思います。

ぼくはこれまで、学校で先生が言うので、寄付などをしたことはありますが、積極的に困っている人たちを助けたことはありません。イエス様は、困った人たちのために、ご自分の命まで、それも積極的に与えられたのだということを、ここにきて教わりました。

自分だけの喜びや、得になるようにだけ考えて、しなければならぬということもなるべくしないで、楽なことを選んできた僕とは正反対のことなので、最初は、そんなことがあるものかと思っていました。が、どうやら本当のことのような気がしてきました。

考えることやする事の違うものがあることが分かってきたようです。本当にイエス様のように考えれば、きっと世界から戦争や貧しい者と豊かな者の差別などもなくなるのだろうと思います。

だから、僕も困っている人たちに、自分から積極的に何か役に立てるようになりたいと思うように、この頃なつてきました。

そういうことを考えるようになったイエス様のお誕生日だから、世界中がお祝いすることだと思います。



原田家日記

「風呂にはいるぞ！」中三の長男が小さい子たちをお風呂にいれてくれた。「悟君のお隣で寝る」甘えん坊の啓二が悟の部屋へ二階から泊まりに来た。「息子、部屋をかたづけろよ！洗濯はすんだのか？」妹への声かけは家で暮らしている大人たちに不遠慮にも笑われてしまったが、「最近きれいにしているよ」と得意そうに反論される。「うん、そうだね」と、認められた。いつのまにかの成長に気づかされる。私と入浴し、隣で寝ていた日々が、つい、きのうのことのようだ。「大人ってどうしてあんなにいい加減で、子どもにはやましいんだろ」と、心の中で思うこともいっぱいあるに違いない。

一方、子どもたちの分しかデザートがなかったり、大人だけ一品おかずが多かった時など、子どもになったり大人になったり。大人と子どもの中間というとても大切な時を生きている。ある時は、交通費だけ大人じゃないの！と叱られたり、ある時は悟の手伝いなくては何事が進まなかったり、頼る一面が加わっていく。

悟がヒヤシンスの水栽培を始めた。初めてのことで目を見張った。「悟、この花が咲く頃は、いよいよ高校生だね。咲くかな？」ニヤツと笑った悟。高校に行くことが当たり前のような社会の中で、決して当たり前でない彼の状況がある。外側の状況だけではなく、力を出す、そのことのために、何倍もの努力をしなければならぬ。この家から高校生を誕生させるのは切実な願いではあるが、それもまたゴールではなく、一つの過程に過ぎない。だからこそ、ぜひ必要な、通らせた道である。悟は、自立という大きな目標に向かって、すでに歩みだした。

外は枯れていても、この家には、クリスマスに備え待ちながら、新しい年への希望がふくらみ始めている。新しい年はきつと悟のヒヤシンスを咲かせてくれるに違いない。

竹花 信恵

子どもたちの季節

仙道家

仙道家の小学生八人は、スイミング三名、剣道三名、書道とピアノが一名づつ習い事をしていきます。施設の子どもとしてある最初の差別を得意な何かを持って乗り越え、普通の家庭の子どもと肩を並べて学校生活を送って欲しいとの願いを担当者が・・・

先日、スイミングに三人を励ましにいつてきました。その日は月に一度の級審査でした。そろそろ進級して欲しいなあと思う亜季と悠子、十月から始めたばかりの智紗。子どもよりもドキドキしてしまいました。亜季と悠子は同じ先生。智紗は入ったばかりなので、離れたところで少々緊張気味です。対象的に亜季と悠子は慣れたもので「悠子！」と先生に水をかけられるのもしばしば、私も目にはなせません。

何とかテストもおわり、先生の表情を見る限り、何とかパスしたようでした。でも、合格証を見るまでは分かりません。先生がひとりづつ進級した子どもへ渡していきます。ドキドキ・・・三人の一番乗りで亜季がもらいました。ガラスの外の私に遠くから「もらったよー」と満点の笑顔の合図。悠子も合格！洗面器に顔を漬けて鼻から息を出す練習の成果です。やつと智紗が笑顔を見せて合格！剣道では月一度の月例試合で優勝杯を持つてくるようになりました。毎朝中三の初段の二人が素振りの稽古を見てくれています。

勇の書道は目立つ機会は少ないのですがとても上手です。絵も得意で芸術家勇の面目躍如です。

萌季はピアノの練習を一日三十分することを決めました。宿題の多い日は外で飛び回るのを我慢してピアノに向かいます。音に自信がつき萌季らしさがでてきました。

それぞれ輝くものも違い、時も様々で、合格や優勝などで自信になり、誉められ、励まされて輝きます。それでやつと普通の家庭で家族と暮らしている子どもたちと互にしているのです。五来淑子

まなざし……

佐藤家

潔と滋はプロ野球の西武ファンである。彼らをヒヤヒヤさせながらも大満足の日本シリーズも終わり、前からの約束で滋にレオ人形をプレゼントした。その日から毎夜そのレオ人形を横において寝ている。そのかわいがりがたは小学五年生の男の子がするとはまるで思えない。彼の心の奥にある寂しさや悲しさが見えてきそうである。

そんな滋とエジプトに行く約束をした。四年前私が行ったときの話をしてやった。ピラミッドやスフィンクス、ナイルの広大な流れなどの話を聞いて、非常な関心と興味を示した。「ねえ、エジプトに行くのにどれくらいお金がいるの」と聞いてきた。「そうだなあ、穴水さんが行ったときで、二五万円ぐらいだったかなあ」「じゃあ、僕二五万円貯めるよ、そしたら連れて行って案内してよ。あつ、そうだ、あそこは砂漠が多いからさそりが出るでしょ。そしたら高山君も連れてつて、さそり退治してもらおう。絶対だからね。」と隣と同じ年の虫が大好きな高山君まで巻き込んで夢は膨らんだ。

そんな彼の二学期は大揺れに揺れた。

彼がここに来たとき六才だった。どんな人間でも耐えられそうもないほどの酷い家族関係が、一気に惨憺たる終末を迎え、その混乱の渦中の入所だったのである。だから、今になって、どうして自分がここにいないかならなければならぬが腑に落ちない。それを誰にも聞くことが出来ない。そんなモヤモヤが、感情を爆発させる。そしてまた自分が嫌になっていく。

機会を得て丁寧な真実告知と入所の再体験という大手術。それへの全力を尽くす看護と日数をかけた予後を経て、ようやく心の傷が癒えかかり、立ち上がろうと機会を手探っている。

各国大使のご夫人たちの招請が今年もあり、虹の会とGOGO会が合同の、クリスマスパーティーをトルコ大使館で行う。彼は自ら、そこで主役ヨセフを演じる。

穴水 祐介

現場から

育ちゆく子らと 九

秋本 光代

一年の中で、一番充実した時

間が、クリスマス前一か月のアドヴェント期間です。最も忙しく苛立つことも多いのですが、ページエントの練習やプレゼントの準備などをしながら、何かしら入待っているVのがとても好きな季節です。

今年を振り返る時期でもありますが、本当にいろいろな事がありました。一人ひとりの子どもたちの顔を思い浮かべながら、程度の差はあっても、その確かな成長の手応えを感じます。

その成長を表現するさまざまな行動や言動をどう捉え、どう反応することが適切なのか、思春期真っ只中の子どもたちもいて、難しい時期にさしかかっていることも感じさせられます。

思春期の子どもへの対応は難しいが、可能性に満ちて、一番美しいとも言われます。

七年前、教育実習で中学生の目の奥がキラキラ輝いているのを見て、子どもの役にたつ仕事を

をと入決めたVのでした。

今でも授業参観などで中学校に行くこと、何だかわくわくしてきて、自分もこうだったのかなと、その頃のことを思ったりすることもあります。

中学一年から小学三年までの五人の子どもを担当していて、それぞれ長所も短所も持ち合わせていて、考えると優劣つけ難いにも関わらず、一番上の逸郎にはつい身構えて、一番難しいと感じてしまいます。

四年生でここに来て、担当保母の退職などで、二年余り前に私が担当することになったのですが、私自身も、逸郎も初めての中学校生活なのです。

逸郎に学校の何かを尋ねられても分からないことが多く、子どもに言われないと何もなかつたことと思つて過ごし、子どもが頼りの今年度でした。

逸郎も、初めてづくしの、部活動や学習……。ついて行くだけで精いっぱい状況の中で、

先日の授業参観の折りの先生の、明るくて役割をキチンと担つていて、クラスの一員になつているとのお話で、「よかつた！」

と思ひ、ほつとしました。

家では、なすべきことをしないで済まそうとしたり、なかなか動かず、人を不快にさせ、悩ませる逸郎が、学校では……

まるでエネルギーの全てを学校以外では消費しないと決めていられるように思えてしゃくにさわつたりもします。

時に気まぐれのように役割を促されずにしていたり、小さい子に親切にしたりすると、「どうした風の吹き回し？」と不安にさえなつてしまいます。逸郎には申し訳ないと思ひながら、裏切られることが少し恐くなつている私の弱さでもあります。

理想の中の中学生像と、逸郎の見せる暮らしのギャップにふりまわされてしまいます。

逸郎は、この頃、マイナスの場面でも「自分がいいんだからいいよー」と言うようなことをよく言います。「でも、将来もそれでいいだろうか？」と、未来を見つめ、将来を自分で創る

ことを促すと、能面のような顔をしながら涙を流します。まっすぐに未来を見ることが、恐く辛いことなんだと感じました。

恐ろしいばかりの過去から引きずつてきている現実を見ると、未来もその延長線上に描かれ、出来れば避けたいと思うのは当然なのだろうとも思ひます。

私の身勝手さや、弱さで、逸郎の暮らしの中の誠実さを枯らさないよう、丁寧に育てなければならぬと強く思ひます。

先日菅原先生に、「学校できちんと明るくやつていて、家ではそうではないというのは、うまくいっていることだよ。学校では緊張し全力を尽くしているんだ。だから家ではゆっくりしたいし、甘えているんだよ。それが家の役割なんだ。」と言われ、もう一度ほつとしています。

考えることさえ残酷なほどの逸郎やみんなの境涯の中で、自分で切り開く未来こそを、夢見

て、励むようになれるような暮らしを創る手助けになりたい。

子どもたちが待ち続けるささやかな夢のようなクリスマスの備えに励み、祝福を祈ります。